

おとなになる旅

澤地久枝



おとなになる旅

澤地久枝



ポプラ社



著者略歴

昭和5年東京生まれ。10年両親と共に満州へ。
21年引き揚げ。中央公論社に経理事務員として勤務しながら早稲田大学第二文学部卒業。
「婦人公論」編集部配属。38年退社。五味川純平氏の資料助手を10年続けフリーに。この間2度の心臓手術。

主な著書に『妻たちの二・二六事件』『密約』『火はわが胸中にあり』（第5回日本ノンフィクション賞）『烙印の女たち』『昭和史のおんな』『ぬくもりのある旅』『石川節子』などがある。
1981年エイボン女性年度賞功績賞受賞。

おとなになる旅

ポプラ・ブックス 57

1981年12月 第1刷 1987年7月 第10刷

著者 ^{さわち ひさえ}澤地久枝 © 1981

発行者 田中治夫

発行所 株式会社ポプラ社

〒160 東京都新宿区須賀町5 振替東京4-149271
TEL 03 (357) 2211

写植 株式会社電算プロセス

印刷 暁美術印刷株式会社・有限会社トラヤ印刷所

製本 富士製本株式会社

ISBN4-591-01596-3

落丁・乱丁本はおとりかえいたします

N.D.C.159/214P/20cm

暗さを呪うより、

たった一本の蠟燭でもともすほうがよい

—— 中国の古い諺より

おとなになる旅 もくじ

I 牧歌^{ぼっかてき}的な日々

貧^{ます}しさの中の愛 6

遠^{とお}っ走^{はし}りのチャ―坊^{ぼう} 25

斗^とタセクスアリス 38

忘^{わす}れられない授業 47

牧歌^{ぼっかてき}的な日々 56

すべりおちる幸福 70

II 孤独^{こどく}を知った日

大陸^{たいりく}の子どもの四季 82

III

おとなになる旅

最初に出会った死 96

三十五銭の盗み 110

孤独を知った日 118

はみだしっ子 130

はだかの王さまが見えなくなる日

みすてられた人びと 168

引き揚げ行 191

おじの自決 196

あとがき

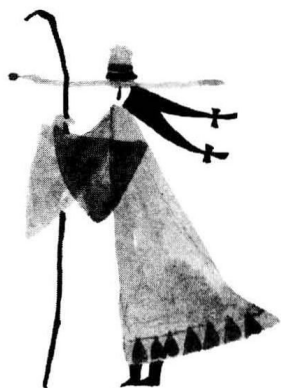
150



装丁・カット
安野光雅

I

牧歌^{ぼっか}的^{てき}な日々



貧しさの中の愛



わたしが生まれたのは、一九三〇年、昭和五年です。九月三日に生まれました。乙女座だそうです。わたしはこの秋、五十一歳になりました。

今、昭和は五十六年、もう半世紀以上もたっているんですね。昭和ヒトケタ生まれのわたしも半世紀生きてきたというわけで、そうかんがえると、じぶんがスフィックスの子分になったような気がします。長かったような気もするし、短いような気もします。

わたしが生まれたころというのは、日本は不景気のどん底でした。不景気ってわかりますか。昭和という時代は、その幕あきから、金融恐慌といって銀行がつぶれて

しまうようなことがあって、おおぜいの人^{びんぼう}がひどい貧乏に苦しんだ時代だったと思います。

そこへ昭和四年に、アメリカで大きな経済^{けいぎ}パニックがおきて、世界中ガタガタになったの。失業者^{しつぎょうしゃ}もふえたしね。日本は金融恐慌から立ちなおれないままに、その世界的な不景氣のあおりを受けたんですから、わたしが生まれたころの日本の世相^{せそう}というの^{しよくにん}は、ほんとうに息もたえだえという状態^{じょうたい}だったようですよ。

職人^{しよくにん}さんなどは働いてもお金をもらえないし、大学を卒業した人は就職^{しゅうしよく}ができません。そういうことが、ちっともめずらしくなかった時代です。

女^{おんな}の人はなにをしていたかという^{じようろう}と、女工^{じようこう}さん、女中^{じうちゆう}さん、あるいは電話^{でんわ}の交換手^{こうかんしゅ}。男^{おとこ}の人と肩^{かた}をならべて働くなどということは、かぎられた人^{ひと}に、ごく細い道^{みち}がひらかれていただけです。昭和初年、女性^{おんな}は義務教育^{こむぎく}の小学校卒業までというの^{もんもう}がほとんど。文盲^{もんもう}の女性^{おんな}はめずらしくなかったのです。

わたしが生まれた九月三日という日は、ちょうどその日の夕刊^{ゆがん}に、東京で一家^{いけ}が食いつめて、働いても食べられなくなつて「都落ち^{みやこおち}」をしていく人^{ひと}たちのことが記事^{きじ}

になっています。

東北であるとか、あるいは関西にせよ、九州にせよ、地方に故郷こきようをもっている人たちは、都落ちみやこおして郷里きやうりへにげのびていったのです。平家の落人おちうとならぬ、昭和の落人です。

東京から地方をめざして帰るわけだけれど、汽車にも乗れずに、とぼとぼと旧東海道を歩いてゆく人たちがあとをたたない。みんな家族づれで、足をひきずって歩いているし、夜通しよどお歩いて食べるものもないという状態じやうたいだったようです。

お寺の本堂ほんどうの下で眠ったり、あるいは夜中にちようちんをつけて歩いたりしている、そういう落ちてゆく人たちのために、街道筋かいどうすじの人たちが、村で炊き出しただをして、おかゆをふるまったという新聞記事がでています。

ちようどじぶんが生まれた日に、そういう新聞記事がでているということに、わたしが生まれた時代がともわかりやすくでていると思います。あなたの生まれた日は、どんな日だったかしらね。

わたしは、お見合い結婚みあけつこんした両親の最初の子です。

生まれたのは、今、シャンゼリゼ通りなどとよばれ、竹の子族^{たけこぞく}などで知られる原^{はら}宿^{じゆく}界^{かい}限^{わい}です。

むかし、港^{みなと}区^く青^{あお}山^{やま}北^{きた}町^{まち}といったあたりの小さな借家^{しゃくや}でわたしは生まれました。

父も母も、もちろんつつましい生活者として生きていたわけですし、わたしは、母^{はは}方の老^おいた祖^{かた}父^お母^{はは}から、初^{はつ}孫^そという^{こと}で、ほんとうにかわいがられました。

その誕生^{たんじよう}を喜びむかえられた子どもではありませんでしたが、生まれてまもなく、父は家の建築^{けんちく}を請^うけ負^おつて家は建てても、建て主^{しゅ}が破産^{はさん}していなくなつたりして、お金にならない。母の衣類^{いり}などはみんな、質屋^{しちや}に質草^{しちくさ}にはいつてしまい、とても家族三人食^{さんしょく}べてゆけなくなり、父の姉の婚家^{こんか}さきへ、母とわたしは居候^{いそうろう}にゆくというのが、わたしの人生の旅立^{たびだ}ちです。

もちろん、赤ちゃんだった日のわたしが、そのころのことをおぼえているのではなくて、母がぐちまじりに、新生児^{しんせい}であつたわたしをつれて居候をした体験^{たいけん}のつらさを、くりかえしくりかえし話したからです。

よその家に身をよせて、やっかいになつてゐるときは、とつてもおなかがすくんだ

そうです。あとでわたしも経験けいけんするので、今はよくわかりますが、母の話をきいた子どもたちには、実感じつかんはありませんでした。

ともかく、赤ちゃんにおっぱいをやりながら、義理ぎりある家でごはんをごちそうになっていると、おなかいっぱい食べても、おはしを置おいたとたんに、もう空腹くうふくを感じる、それぐらい居候いそうろうというものはつらいものだというのを、母はこわれたプレイヤーみたいにくりかえましたよ。

若わかかった父は、働いてもなにも答えない生活にいや気がさしたんですね。

わたしの父も母も、小学校だけしか卒業していません。わたしの両親だけが、とくべつなのじゃなくて、昭和の前半、はじめの十年ぐらいのあいだは、なかなか中学校へいける男も女も数はすくなくったのです。

ほとんどの人が義務教育の小学校までの六年、よくても小学校の高等科（二年）までという学校生活でした。

中等学校へいける子どもたちはめぐまれた境遇きようぐうの子というのが、昭和の最初のころの日本の社会です。

父は三歳ぐらいで両親を失って、姉とふたりみなしごになって、祖母の手でそだてられたんです。

子どものころからいろいろ苦勞してそだって、ほんとうは愛情に飢えていて、とても人恋しい、人なつっこい氣持とどうじに、氣むずかしくて人をよせつけないわがままな性格もあつたのですね。

母にむかつては、そのわがままで身勝手なところが全部でしまったようで、男と女の組み合わせとしては、わたしの両親は、どこかで齒車がぐいちがった夫婦として、一生終わってしまったような氣がします。

母は、とても手さきのきょうな人で、手内職の仕立てものをして、つまり和服を縫って、一所懸命働きましたが、母の表現を借りると、寝る間もおしんで針のお尻をつついて働いても、女の嫁ぎはたかが知れている、お米をかうのがやつとなのね。

それで、そのころわずか十錢というお金で、三日間のおかず代をまかなつたというのが、晩年の母の「手柄話」でした。十錢というのは、今のお金の実感でいえば、百円といつたらいいでしょうか。百円で家族の三日分のおかずを作るのは、ほねがお

れますよね。インスタントラーメンだって、いくつも買えないでしょう。

そういう貧乏暮らしびんぼう暮らしをしていて、父が生活につかれはてる、からだがつかれるのではなくて、気持がずさんで、生きることにあきて、なにをやるかわからないというあぶない徴候ちゆうこうを、そばにいた母は感じたようです。

わたしが生まれた翌年の九月に満州事変まんしゅうじへんがおき、そして昭和七年に、日本は満州国まんしゅうこくを中国の一部につくります。日本の植民地しよくみんちです。

そのころは、馬賊ばぞく、匪賊ひぞくが横行おうこうするといわれて、ゆけば命がぶじかどうか知らないというようにいわれた満州（現在の中国の東北地方）でしたが、なんとかそこで、新天地しんてんちをひらく以外には、一家にはぬけ道なしと母はかんがえたんです。わが家の中国ゆきが、父ではなくて母によってきまったというところは、女のたくましさ、思いきりのよさといったらいでしょうか。

わたしのおきな友だちのおとうさんに、満州国政府の要職ようしよくについていた方がありました。

満州国というのは、形式としては中国人の新国家として発足はつそくしましたが、政治

にせよ、經濟にせよ、官庁にせよ、要職はぜんぶ日本人がおさえていて、つまりは日本人支配のカイライ国家です。中国人を支配することで、日本人がはいりこんでいく余地が十分ある「新大陸」だったわけです。

母自身、東京生まれの東京そだち。外国などまったく知らないのに、わたしの友だちのおとうさんに、父の満州での就職をたのみにゆき、父は昭和九年、わたしたちをのこして、満州国の新首都・新京（長春）へわたりました。

母方の祖母、母、そしてわたしは、父の出発後、祖母のいた小さな借家で女三人の生活をはじめました。

母には弟がひとりいました。わたしにとっては、おじですね。

日本にはむかし、国民の義務として徴兵制度があり、二十歳になると徴兵検査とというのがあったのです。

おじは甲種合格になって軍隊へゆきました。二年くらいで除隊になって、予備役にはいるのがふつうです。予備役というのは、いざ戦争になったら、必要におうじてすぐ兵隊になるという状態です。除隊満期がきても、おじは老いた両親の待つわが家

へは帰りませんでした。そのまま職業軍人の人生をえらんで、軍隊にのこったのです。

「人のいやがる軍隊へ、志願でゆくよなバカもある」という歌を、かすかながらわたしはおぼえています。

そういう軍隊をじぶんの一生の仕事の場にえらばなければならなかったおじの人生は、ほかにえらびようのないきびしいものでした。この人にも学歴はありません。

わたしは、このおじにとてもかわいがられました。

わたしの人生で、じぶんがとてもだいじにされ、愛され、その人たちにとってかけがえない存在と思われていると感じた最初の思い出をつくってくれた人は、まず祖父です。

わたしは祖父の初孫です。つえをついた老人は、

「うちのお孫さん」

とよんで、まるで宝物のようにたいせつにしてくれました。

老衰で寝ついてからも、遊びにゆくと、ふとんの下から巾着型のお金入れをだし